

定量的超音波法装置を用いた骨粗鬆症検診について

○永岡睦美、池田加代子、大谷有美、吉田晴美、渡辺 伸、柴田眞一、鈴木 仁

公益財団法人福島県保健衛生協会

【はじめに】

骨粗鬆症は高齢化社会に入ってから急速に増加し、寝たきりの原因として脚光をあびており、その防止には、早期発見・早期治療により進行をくいとめることが大切である。今回、私達は、定量的超音波法装置を用いた骨粗鬆症検診を行ったので、その実施状況について報告する。

【対象と方法】

平成21年度から平成24年度にかけて、当協会で骨粗鬆症検診を受診した地域住民の女性47,160名を対象とした。

検診に使用した機器は、日立アロカ社製超音波骨評価装置 AOS-100 型と AOS-100NW 型である。測定は踵骨部分を透過する超音波の音速 (SOS) 値と透過指標 (TI) の演算から音響的骨評価値 (OSI) を求め、若年成人平均値 (YAM) と比較して、90 % 以上を異常なし、80 % 台を要指導 A (やや低下)、70 % 台を要指導 B (低下)、70 % 未満を要精検とした。

【結 果】

1. 検診実施市町村は、福島県内 59 市町村のうち 49 市町村であった。
2. 検診は、地域住民の特定健診や婦人科検診時に希望者を募って行ったが、なかでも対象者を 40 歳から 70 歳の間で 5 歳毎の節目年齢に相当した人としたが、22,402 名がこれに該当し、これは全体の 47.5 % を占めていた。
3. 受診者が最も多かった年代は、60 歳代の 18,542 名 39.3 % であり、50 歳代の 13,007 名 27.6 % がこれに次いでいた。

4. 検診により得られた年齢別OSI値は、日立アロカ社の標準曲線と比較し同様の成績が得られた。
5. 受診者の判定内訳は、異常なし 41.7 %、要指導 A 39.8 %、要指導 B 17.9 %、要精検 0.6 %であった。骨量の低下が伺える要指導 B 以上は、50歳前半が6.1 %、50歳後半は 14.7 %に増加し、60歳前半には 21.2 %、60歳後半では 28.5 %、70歳前半では 36.5 %、70歳後半には 50.3 %と加齢に伴って急増していた。

【考察と結語】

一般に骨量は思春期から20歳位までに最大に達し、ホルモン分泌の変化に伴って閉経期頃から急激に減少する。ゆえに将来、健やかな生活を送るためには、若いうちからの生活習慣を正し、自分の骨量を知っておくことが重要である。当協会では、骨粗鬆症予防事業として巡回検診だけに限らず、健康イベント等に協賛するたびに骨量測定を行ってきた。

今後さらに老若男女を問わず骨粗鬆症検診受診の機会を広げていくよう努力したい。